

高校野球フィールドマネジメント 4.0

—「武士道野球」と「スポーツ野球」の信念対立の克服を目指して—

高 柿 健

要 旨

本論では現代の高校野球の価値形成において生じている「武士道野球」と「スポーツ野球」の信念対立構造について、構造構成主義に基づいた信念対立解明アプローチによる分析を試みた。これに従い、高校野球フィールドマネジメント 4.0 における相対可能性と連携可能性の確保を目指した価値形成の一方法論を考察した。

キーワード：信念対立，信念対立解明アプローチ，構造構成主義，志向相関性

1. はじめに

「楽しいはずの野球なのに、子供たちは楽しそうに野球をやっていない」

2019年1月、DeNA ベイスターズの筒香嘉智選手が日本外国特派員協会で指導者の意識改革を訴えた。子供たちが指導者（大人）の顔色を見てプレーをしていることに警鐘を鳴らし、さらにその原因が指導者の勝利至上主義にあると指摘したのだ。2018年には、日本大学アメリカンフットボールのタックル問題に端を発した指導者のパワーハラスメント問題が、その他の競技にも派生して社会問題となった。これまで閉鎖的であったスポーツ現場の伝統的な慣習や体質がマスコミやSNSの過熱によって社会的俎上に載せられ、一般価値のメスで裁かれているのである。

近年、高校野球においてもアスリートファーストの観点から制度改革が進められている。第80回選手権大会（1998年）準々決勝でPL学園（南大阪）と対戦した横浜（東神奈川）・松坂大輔投手が延長17回で250球を投じたことを契機に2年後、延長15回制に短縮された。さらに2018年には延長13回からのタイブレーク制が導入された。第100回選手権大会（2018年）では公立校である金足農業（秋田）が決勝戦に進出するも、ひとりエースの吉田輝星投手の連戦連投（881球）により大阪桐蔭（北大阪）に2-13のスコアで敗退した。これを受け、翌年の第101回

大会では決勝戦前に休養日が導入されるとともに、投手の球数制限の議論が加速されることになった。

そんな中、2019年夏、最速160 km/hを誇る岩手・大船渡高の佐々木朗希投手の決勝戦登板回避問題が生じた。勝てば甲子園が決まる地方大会決勝戦において、大船渡高の監督は連投による故障を防ぐ理由で佐々木投手の登板回避を決断し、敗退した。この事件は登板の是非はもちろんのこと高校野球の選手酷使問題へと議論の射程を拡げ、高校野球の「甲子園」に対する価値を揺るがすものとなった。この新たなゆらぎはこれまで頑なに守られてきた高校野球のローカル・スタンダードと現代スポーツのグローバル・スタンダードの価値対立の顕在化としてとらえることができる。

19世紀後半（明治期）に伝来した欧米スポーツとしての野球は、日本人のアイデンティティとの融合が課題であった。そのため伝統的価値と結びつけやすい武士道スタイルの野球が継承されることとなった。本論ではこのスタイルを「武士道野球」と呼ぶことにする。これに対し、近年はスポーツ科学の発展により合理性や効率性が追求されることとなり、「個」のフィジカル面のアプローチが格段に進歩した。30年前、皆無だったメジャーリーガーが多数誕生したこともこの成果であるといえる。この科学的野球スタイルを「スポーツ野球」と呼ぶことにする。この2つのスタイルを両極の理念型として現代高校野球の価値改革を考える。現代高校野球では、これまで守られてきた過剰な集団主義の「武士道野球」と個を尊重した「スポーツ野球」の信念対立が生じている。そこで、本論ではこの信念対立構造を京極（2011）の信念対立説明アプローチによって明らかにし、現代の高校野球フィールドマネジメント4.0における価値形成の方法論を考察、提案することを目的とする。

スポーツのマネジメントにはプロスポーツ球団などのビジネスマネジメント（以下、BM）とチーム内のフィールドマネジメント（以下、FM）があるが、本論が対象とするのは後者のFMである。いずれのマネジメントもチームの価値観を前提に行われるが、特に高校野球のFMにおいては始発点が武士道スタイルであったため、その在り方が常に問われてきた。そこで、まずは高校野球FMの価値変遷から信念対立構造を明らかにしていく（FM 1.0からFM 4.0の定義は高柿（2018-2019）を採用）。

2. 高校野球の価値形成

2-1. FM 1.0 「武士道野球の形成」

「ベースボール」は1872年（明治5年）アメリカ人教師ホーレス・ウィルソンによって第一大学第一番中学校（開成学校の前身）に伝えられた。のちに開成学校と工部大学校が合併して東

京大学となり、その予科として第一高等中学校（以下、一高）が設置された。この一高で「ベースボール」は日本独自の「野球」へと変換されたのである。また同時期にアメリカから鉄道技術を学んで帰国した平岡熙が日本初の野球チーム「新橋アスレチック倶楽部」を創設したが、自主運営のため資金面の課題から徐々に衰退していった。こうして日本の野球は「学校」制度を通じて普及拡大していくこととなったのである。

伝来時、スポーツ野球である「ベースボール」が日本文化に受け入れられることは容易ではなかった。それまでの我が国の競技は武道であり、それと同等の人間修養的価値が求められたのである。そのため、一高ではエリート学生の育成手段として勝利至上主義、鍛錬主義、集団主義が掲げられ、選手はスポーツとしての身体的快楽を表現することを戒められた。こうした日本独自の野球をロバート・ホワイティングは「野球武士道」と呼んだ（Whiting, R. (1977)）。早稲田、慶応はアメリカ遠征によって最新の野球技術を持ち帰ったが、練習方法や勝負に対する姿勢などは一高の精神主義スタイルが継承され続けた。

1911年（明治44年）、東京朝日新聞が「野球は有害なスポーツである」とする野球害毒論争を引き起こすも、スポーツ愛好団体である天狗倶楽部・押川春浪（早稲田OB）、安部磯雄（早稲田野球部初代部長）、橋戸信（早稲田野球部元主将）らが「野球は武道と同じ効用がある」「武士道精神はフェアプレーやスポーツマンシップに通じるものだ」と必死に擁護した。この思想を引き継いだ飛田穂洲も「日本の学生野球精神の発祥地は第一高等学校の校庭である」と一球専心・一打入魂の精神主義を踏襲し、「学生野球の父」と呼ばれた。

1915年（大正4年）に開催された第1回全国中等学校優勝野球大会では「凡てを正しく、模範的に」がモットーとされ、「礼に始まり、礼に終わる」と本塁上での整列・挨拶が儀礼化され、1938年の第24回大会の選手宣誓（掛川中（静岡）村松幸雄主将）では「我等ハ武士道ノ精神ニ則リ、正々堂々ト試合シ、誓ッテ中等学校野球ノ精華ヲ發揮センコトヲ期ス」とその武士道的価値が明言された。

当時の中学野球（現高校野球）は武士道精神の中でも、特に忠誠心や協調心の「犠牲的精神」と「敢闘精神」がマスコミによって美化されていた。敢闘精神は最後まで諦めず、必死に戦う姿勢をいい、フェアプレー精神と同義に考えられた。これはそれまでの結果重視の勝利至上主義を中和するプロセス主義の価値観ともいえる。さらに学生野球では「教育の一環」としての価値スタンスが強調された。高校野球は全国高等学校体育連盟（高体連）には加盟せず、独自の日本高等学校野球連盟（高野連）を組織し、他のスポーツの模範的立場で逸脱行為（不祥事）を厳しく指導してきた。その基準となるのが、国が野球を監視する野球統制令^①を経て1950年（昭和25年）に制定された日本学生野球憲章である（図表1参照）。

戦時中、武士道精神は歪曲され、非合理的な精神至上主義が肥大化していった。戦後、軍事教練

図表1 日本学生野球憲章前文（平成29年2月27日改正）

国民が等しく教育を受ける権利をもつことは憲法が保障するところであり、学生野球は、この権利を実現すべき学校教育の一環として位置づけられる。この意味で、学生野球は経済的な対価を求めず、心と身体を鍛える場である。

学生野球は、各校がそれぞれの教育理念に立って行う教育活動の一環として展開されることを基礎として、他校との試合や大会への参加等の交流を通じて、一層普遍的な教育的意味をもつものとなる。学生野球は、地域の組織および全国規模の組織を結成して、このような交流の枠組みを作り上げてきた……(以下省略)。

の流れを踏襲した退役軍人がスポーツ指導者になったことから過度な礼儀主義、体罰、犠牲的集団主義、練習万能論、坊主頭といった軍隊様式が野球に持ち込まれることとなった。さらに1964年の東京オリンピックで金メダルを獲得した全日本女子バレー（通称「東洋の魔女」）の大松博文監督が精神・鍛錬主義を貫いたため、「根性論」が日本のスポーツ界に根づくこととなった。当時は「巨人の星」「アタック No.1」「エースをねらえ！」などのスポ根アニメも流行し、特訓、身体の酷使シーンが多く描かれた。弱者が困難を克服する高度成長期の日本人のガンバリズムにマッチしたのである。

2-2. FM 2.0 「破壊的イノベーション」

1974年に耐久性の課題から金属バットが導入されて以降、徳島・池田のパワー野球のように伝統的スタイルから脱して合理性、科学性を武器に集中特化したチームが現れた。高校野球はFM 2.0の時代を迎えたのである。1980年代には、アニメでも「タッチ」「キャプテン翼」といった恋愛やスポーツを楽しむといった新たな価値観が芽生え、集団から個へとその価値単位も変化した。開始した。

池田・葛文也監督がいち早く導入した筋力トレーニングによる「やまびこ打線」はそれまでの高校野球FM 1.0を一蹴した。第64回選手権大会決勝（1982年）ではFM 1.0の象徴的なチームである広島商業（広島）を12-2で破り、ビッグボール⁽²⁾のFM 2.0への転換を印象づけることになった。池田の巻き起こしたパワー野球の波はその後、帝京（東京都）や智辯和歌山（和歌山）といった強打のチーム形成に影響を与え、全国に広がっていくことになった。葛監督のサインを出さず、選手にのびのびと打たせるスタイルは高校野球監督の憧れの理想型とされたのである。

FM 2.0への転換によって、チーム以上に選手「個」の能力がクローズアップされ始めた。甲子園のアイドル的存在であった早稲田実業（東京都）荒木大輔投手を池田が打ち破り、その黄金期の池田をPL学園・桑田真澄、清原和博選手（KKコンビ）が打ち破るといったチームの戦いプラス超越的な能力主義の戦いが展開され始めたのである。同時期に取手二、常総学院（ともに

茨城)を全国優勝に導いた木内幸男監督の「型」にはまらない、セオリーを逸脱した采配、通称「木内マジック」も「個」に応じた新たな高校野球のスタイルといえる。FM 1.0で形づくられた高校野球の戦術スタイル(価値)は金属バットという破壊的イノベーションをきっかけに、新たなマネジメントスタイルの2.0へと移行することになったのである。

2-3. FM 3.0 「能力主義」

1990年代に入るとインターネットの発達により情報化が進み、科学によってスポーツの課題が次々と解き明かされていった。高校野球は能力主義が加速し、FM 3.0の時代へと突入した。特に運動生理学、心理学、バイオメカニクスなどのスポーツ医科学の分野が目覚ましい発展を遂げ、筋肉や骨格、循環器をはじめとする身体器官の機能向上の研究が進んだ。かつての「肩を冷やすな」「水は飲むな」といった定説は一気に覆されたのである。高校生もスポーツ科学の発達で身体は大きくなり、松井秀喜選手や松坂大輔投手のような、より強い打球が打て、速いボールが投げられる大型選手が出現した。ダルビッシュ有、田中将大、前田健太、大谷翔平選手といった現在メジャーリーグで活躍する甲子園経験選手も多数現れることになった。

FM 3.0時代の甲子園では、こうした能力の高い選手が獲得できる私学強豪校(能力型チーム)が明らかに優勢となった。2018年、春夏連覇を達成した大阪桐蔭に代表されるように甲子園常連校から多くのプロ野球選手が輩出されていることから能力型優位の状況が分かる。以前の高校野球チームはレギュラー争いという競争関係を内包しつつ、甲子園という共通関心(理想)によって、チームを優先した集団主義が強調されてきた。多数の部員を抱えるチームでは、その大半が控え選手であるため、ある意味「犠牲」を伴うマネジメントが許容されてきたといえる。しかし、「個」の能力主義の野球が浸透し、SNS等が発達したことで、声の大きいだけではチームの統制が難しい状況が生まれている。これは高校野球文化の担い手である指導者の統制も同様で、この度の登板回避問題のように高校野球における甲子園(価値)の位置づけが多様になっている。これによりこれまでの高校野球価値を逸脱した行為が生まれはじめているのである。

3. 信念対立の解明

3-1. 信念対立解明アプローチ

京極(2011, pp.60-61)によれば、信念対立とは「それぞれが自分の信念を自覚することなく絶対視することにより起こる根源的な対立」のことであり、疑義の余地のない信念が矛盾したときに起こる人間同士の争いのことである。まさに武士道野球とスポーツ野球はこの信念対立構造といえる。京極はこの信念対立への対処法として、「信念対立解明アプローチ」を提唱している。

これは信念対立を解決するのではなく解明することで問題が問題として成立しない可能性の諸条件を整えるアプローチである（京極（2012））。

信念対立解明アプローチでは原理的考察によって、(1)契機—志向相関的な現象の構造化を行う主体であると自覚させること、(2)疑義の余地なき信念の成立根拠をそぎ落すこと、(3)相互了解可能性を担保した回路を構築すること、を信念対立を生じさせない3条件としている。この(1)と(2)は考えや感じ方の多様性を示唆する「相対可能性」を、(3)はその違いを前提として状況と目的を共有、協力していく「連携可能性」を意味している。この相対可能性と連携可能性が信念対立を解くために必要な諸条件なのである。

3-2. 構造構成主義

信念対立解明アプローチは西條（2005）によって体系化された構造構成主義に基づいて開発されている。構造構成主義は様々な考え方が「信念対立」に陥ることなく諸学を基礎づける学的基盤（普遍学）たることを基本的モチーフにしており、通常の理論（認識論）よりも上位の次元に位置するメタ理論といえる。

構造構成主義は立ち現れたすべての経験である「現象」を構造化（条件開示）することにより再現可能性や予測可能性といった広義の科学性を担保している。さらにその中核概念として「関心（志向）相関性」を位置づけている。これは存在、意味、価値といった対象構造は、身体・欲望・関心のありかたと相関的に発現する、という原理である（西條（2013））。例えば、同じ水たまりでも通常的生活と砂漠の極限状態では身体・欲望・関心が変化するため、その価値は大きく変わることになる。

西條（2005）によれば、方法はこの関心（志向）相関性に基づいて選ばれることになる。方法とは特定の状況（制約）下で特定の目的を達成する手段であり、その有効性は状況と目的（関心）によって判断されることになる。これを方法の原理という。この原理を外れれば本末転倒の「方法の自己目的化」を招くことになる。武士道野球とスポーツ野球を方法的概念として捉えるならば、両概念の信念対立は方法の自己目的化を目指しての対立といえる。これを抑制するためには高校野球の目的と状況（制約条件）を再度、明確にしていく必要がある。

信念対立解明アプローチでは人間を「諸契機」と「諸志向」に「相関的に営為する主体」として捉えている。人間は何らかの契機（状況・きっかけ・雰囲気・運・環境・現実的制約など）をきっかけに諸志向（身体・欲望・関心・目的など）が形成され、これに相関する形で営みが積み重ねられる。これを契機—志向相関性という。信念対立解明アプローチも人間の方法選択では、信念が成立する契機（状況）と志向（目的）からその妥当性を考えていかなければならないと述べている。

スポーツ野球支持者はローカルな武士道野球には非合理・非効率な課題を感じ、グローバルで科学的な野球を目指すことを信念としている。これに対して武士道野球支持者はスポーツ野球では、これまで高校野球が守ってきた教育的価値、精神性の強みを継承することができず、世界と戦う武器がなくなるとする信念を抱いている。そこで信念対立説明アプローチにより、まずはそれぞれの信念形成に至る契機と志向を明らかにする（図表2参照）。

図表2 武士道野球とスポーツ野球の契機—志向—信念

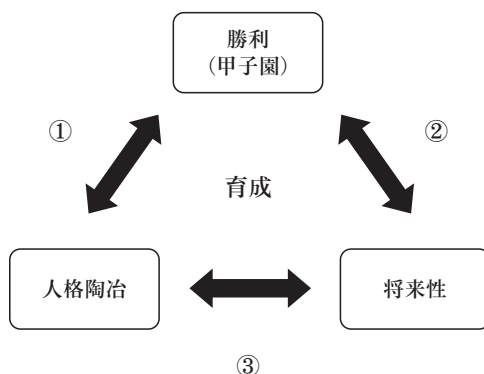
	武士道野球	スポーツ野球
信念	<ul style="list-style-type: none"> ・犠牲を許容 ・集団主義 ・精神主義 	<ul style="list-style-type: none"> ・選手ファースト ・個人主義 ・科学主義
志向	<ul style="list-style-type: none"> ・現在 ・ローカル ・郷土の代表 ・甲子園 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来 ・グローバル ・国の代表 ・プロ野球、メジャーリーグ、国際大会（オリンピック・WBC・プレミア12等）
契機	<ul style="list-style-type: none"> ・野球伝来期の武道的価値の名残り ・軍隊経験 ・栄光の甲子園ストーリー ・職業監督による勝利至上主義での実績 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人エースの投球過多 ・甲子園での投球障害 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 決勝進出投手例 1986年天理・本橋雅央投手 ⇒ 肘痛 1991年沖縄水産・大野倫投手 ⇒ 肘の疲労骨折 2008年常葉菊川・戸狩聡希投手 ⇒ 肘痛 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・野球競技人口の減少

武士道野球は野球伝来期からの武道的価値を継承し、犠牲的精神を美化した甲子園ストーリーを契機に甲子園への志向を高め、集団主義や精神主義の信念を持つ傾向にある。対するスポーツ野球はこれまで美化されてきた一人エースの投球過多、投球障害、さらには野球人口の減少（特に子ども）を契機に、高校野球を通過点と考えたグローバルな志向が高く、個人主義や科学主義の信念を持つ傾向にあることが分かる。

3-3. 高校野球の目的トライアングルの形成

近年の高校野球の目的は「勝利（甲子園）」と「人格陶冶」の信念対立に「将来性」の新たなパラメーターが加わり、トライアングルを形成している（図表3参照）。左辺①は武士道野球の志向を、右辺②はスポーツ野球の志向を、底辺③は犠牲の志向を表す。犠牲が大き過ぎれば当然、

図表3 高校野球の目的トライアングル



選手の将来性は失われてしまう。しかし、2019年のラグビーワールドカップでベスト8に進出した日本代表選手がインタビューで、度々「犠牲」の言葉を口にしたように犠牲心が個人と集団の強いメンタリティと人格陶冶に作用していることは否定できない。そこで犠牲をいかにマネジメントしていくかが、教育の一環としての高校野球の今後の課題となる。武士道野球とスポーツ野球に対する強い固執は「方法の自己目的化」を招くため、犠牲の志向相関性を勘案しつつ、目的トライアングルの拡張を考えていくFMが求められるのである。

一方で、高校野球は同じ条件（ルール）下で戦う競技でありながら、公立校と私立校が混在した状況にある。当然、学校の設立目的等は違うため志向も異なる。それぞれのチームが武士道志向、スポーツ志向を互いの補完的概念として捉えた価値（目的）統一のFMが理想であるが、現状の多様な系では限界があるのも事実である。

4. FM 4.0 「犠牲の志向相関性」

2017年、知性的競技の象徴である将棋でAIが名人に勝利した。これはデータ（機械）学習が経験・熟達知を凌駕したことを意味している。今後、スポーツ界の意思決定においてもAIの導入が急速に進んでいくことが予想される。近い将来、高校野球のベンチワークでもAIが導入される可能性が高い。こうしたAI・IoTの強者・賢者の時代においては、選手やチームの個の力のみで対応することは難しい。場合によっては武士道的集団主義を強みに戦わなければならない。

前提から捉え直す信念対立説明アプローチに従うならば、一つのチームでこの目的トライアングルの達成を目指すのではなく、高校の多様性を担保しつつ、高校野球界（系）全体として目的達成を目指すという方法も考えられる。武士道野球、スポーツ野球の型はその学校のスタイルとして確立させることで系の相対可能性が見い出される。さらに一方の方法を絶対化するのではな

く、他方の方法を発展に向けた揺り戻しの補完的スタイルとして捉えることで全体としての連携可能性を高めることができる。本論では連携可能性の契機・志向・方法を共有し、共通目的に向けて歩調を合わせる相互了解の過程に関しては十分な考察に至らなかったため、今後の課題とする。幸い、高校はプロ野球と違い、地域差はあるが選手自らが志向に合わせて進路を決めることができる。すなわち自分に合った野球スタイルの高校を選ぶことができるため、この方法論の第一条件は担保されているといえる。

リーダーの志向においても、20世紀に高校野球を経験した40歳以上の指導者は武士道野球の志向が強いが、スポーツ科学が発展した21世紀に高校野球を経験した30歳以下の指導者はスポーツ野球の志向が強い傾向にある。時代とともにスポーツ野球優位の信念が確立されることは予測できる。

タイブレーク制や球数制限といった制度改革が急速になされているが、今後の研究課題としては本論で考察できなかった連携可能性と犠牲の志向相関性をいかにマネジメントしていくかの具体的な方法論の考察が求められる。主観的でネガティブな「犠牲」の志向をいかに客観的でポジティブな「貢献」の志向に変換して集団の強みとしていけるかがシンギュラリティを間近に控えた高校野球 FM 4.0 の急務の課題であると考えられる。

《註》

- (1) 1932年(昭和7年)に文部省が学生野球の統制と健全化を目的として発令された訓令(第4号)。
- (2) アウトの生産性をテーマにするスモールボールに対して、ビッグボールはバントなどによるアウトは非生産的なものと考え、出塁率や四球、長打力を高く評価する野球スタイル。

参考文献

- Whiting, R. (1977) *The Chrysanthemum and The Bat: The game Japanese play*, Dodd-Mead (松井みどり訳『菊とバット』文藝春秋, 1991年, pp.64-110).
- 氏原英明(2018)『甲子園という病』新潮新書。
- 京極真(2011)『医療関係者のための信念対立解明アプローチ』誠信書房, pp.48-70。
- 京極真(2012)『信念対立解明アプローチ入門』中央法規, pp.38-72。
- 西條剛央(2005)『構造構成主義とは何か』北大路書房, pp.56-59。
- 西條剛央(2013)「構造構成主義による人間科学の基礎づけ：科学哲学の難問解明を通して」『科学基礎論研究』Vol.40, No.2, pp.37-58。
- 佐伯真一(2004)『戦場の精神史』日本放送出版協会。
- 坂上康博(2001)『にっぽん野球の系譜学』青弓社。
- 大川公一(2001)『攻めグルマ薫さん』アーバンプロ出版。
- 清水論(1998)『甲子園野球のアルケオロジー スポーツの「物語」・メディア・身体文化』新評論。
- 杉本厚夫(1994)「劇場としての甲子園」『高校野球の社会学』江刺正吾・小椋博編, 世界思想社。

- 高柿健（2013）『高校野球のエスノグラフィー：広島県の高校野球チーム編成に関するスポーツ社会学的考察』岡山大学社会文化科学研究科。
- 高柿健（2018-2019）「勝者のインテリジェンス：ジャイアントキリングを可能にする論理学」『ベースボールクリニック』第29巻第7号-第30巻12号，ベースボールマガジン社。
- 友添秀則（2009）『体育の人間形成論』大修館書店。
- 友添秀則（2016）『運動部活動の理論と実践』大修館書店。
- 橋戸信（1905）『最近野球術』博文館。
- 広尾晃（2019）『球数制限』ビジネス社。
- 柳川悠二（2019）『投げない怪物 — 佐々木朗希と高校野球の新時代』小学館。
- 山口裕幸（2008）『チームワークの心理学 — よりよい集団づくりをめざして』サイエンス社。

A Study of the High School Baseball Field Management 4.0
Aim at Overcoming a Belief Conflict
between Bushido-Baseball and Sports-Baseball

Ken Takagaki

Abstract

The purpose of this paper attempted to analyze the structure of a belief conflict between Bushido-baseball and Sports-baseball, which was resulting from the value creation of modern high school baseball. The structure was analyzed by using dissolution approaches for belief conflicts based on a structure constituting principle.

Following the results of the analysis, I suggested a unique method of value creation aiming at ensuring cooperation possibility as well as relative possibility concerning high school baseball field management 4.0.